



きょうりゅう はなし
恐竜たちの お話
だい さく せん
うっかり大作戦

トリスターの部屋から、おこったような泣き声が聞こえてきました。

ジェイクおじいちゃんが急いで2階の部屋に行ってみると、トリスターがお気に入りの消防車をにぎって、なみだをうかべています。消防車のはしごは、折れていました。

「トロイがこわしたんだ。ふんづけちゃったんだよ。」
なみだながらにトリスターが言いました。

「見えなかったんだ。」トロイが悲しそうに言いました。

「だけど、こわしたじゃないか！」と、トリスター。

「ごめんね。」トロイは、消防車がこわれてしまったことで、気まずく感じていました。わざとやったわけではないのです。

「見せてごらん。直せるかもしれないよ。」と、ジェイクおじいちゃんが言いました。

「もう、トロイにはぼくのおもちゃをかさない！」と、トリスター。





「おやおや、トリストン。それは きびしいな。
トロイは あやまってるじや ないか。うっかり
してただけなんだ。」と、ジェイクおじいちゃんが
言いました。

トリストンは、こわれた しょうぼうしゃ 消防車とトロイを
かわるかわる 見ました。なかなか ゆるす きぶん 気分には
なれません。

「恐竜の きょうりゆう クリスピンの はなし 話をしたことはあったかな？」
と、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

「ないよ。」と、トリストン。「クリスピンの
しょうぼうしゃ 消防車も、こわれたの？」

「いや。だが、ある日、クリスピンは まちがって、
お姉ちゃんを ねえ 悲 かな しませてしまったんだ。消防車を
わたしの さぎょうば 作業場へ 持って行って、直しながら、
クリスピンの はなし お話を してあげよう。」と、
ジェイクおじいちゃんが 言いました。



なんにち 何日も、あめ 雨ふりの ひ 日 つづ が 続きました。
あらしの あいだ 間、クリスピンは いっか 一家の
すあな 巣穴の なか 中に いました。クリスピンは、
あめ 雨が やんだら とも 友だちと そと 外で
あそ 遊ぶための ゲーム ゲームを
けいかく 計画するの むちゅう に 夢中でした。





とうとう、^は晴れの^ひ日になりました。クリスピンは、
さっそく^{そと}外でいっしょに^{あそ}遊ぼうと^{しんゆう}親友たちを
さそいに行きました。

「ウェスリー！ サッズ！ どこにいるんだい？」
クリスピンはみんなをよびました。

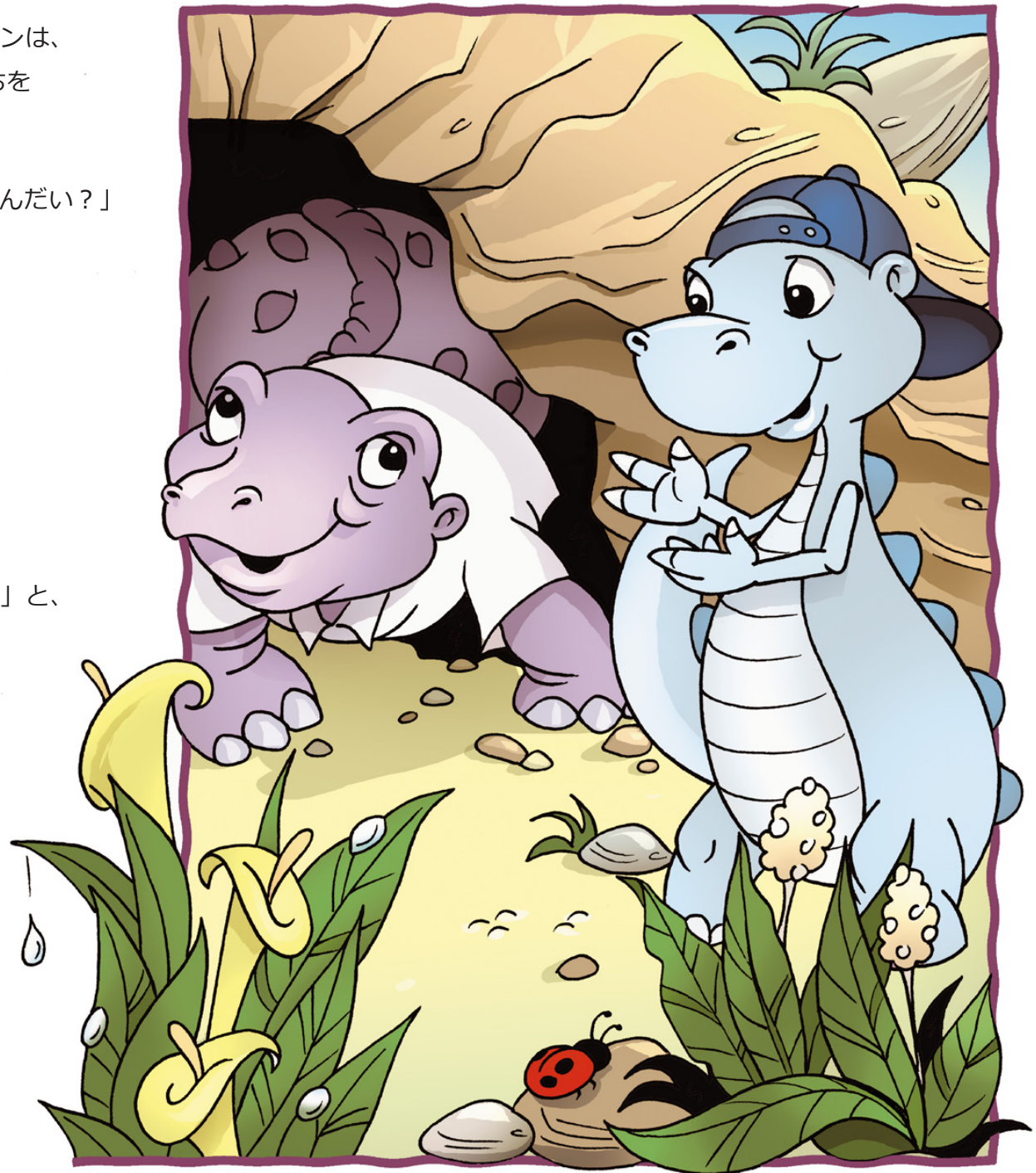
ウェスリーが^{すあな}巣穴から^{かお}顔を出しました。
「ぼくはここだよ。どうしたんだい？」

「サッズをさそって、いっしょに^{あそ}遊ばない？
ぼく、^{はし}走り回って^{あそ}遊びたい^{きぶん}気分なんだ！」と、
クリスピン。

「ぼくも。じゃあ、サッズをよびに行こう。」と、
ウェスリーが^い言いました。

^{ふたり}2人はサッズの^{すあな}巣穴に行って、いっしょに
^{あそ}遊ぼうとさそいました。

サッズも、^{あそ}遊びたくてうずうずして
いました。それで、^{さん}3人は^{ちか}近くの^{もり}森に
^い出かけて^{さん}行きました。3人は、
「^{はたと}旗取りゲーム」をすることにしました。
ただし、^{はた}旗は^{いっぽん}1本だけで、^{ひとり}1人が^{はた}旗をかくし、
^{ほか}他の^{ふたり}2人にそれがうばわれないように
^{まも}守るのです。





ウェスリーが、最初に旗を守る役をすることになりました。サッズとクリスピンが旗と取る役です。

「1・・・2・・・3・・・。」クリスピンとサッズが数え始めました。

ウェスリーは、急いで旗をかくしに行きました。そして、木のみにできた大きな穴の中に、旗をそっとかくしました。

「49・・・50！旗をさがしに行くよ。」クリスピンが大声で言いました。

「ぼくが最初に君たちをつかまえるよ。」と、ウェスリーが言いました。

クリスピンはしげみの中や大きな岩の後ろなどをさがしましたが、旗は見つかりません。

するととつぜん、サッズがこうふんしてさげびました。旗を見つけたのです。ところが、旗を取る前にウェスリーに見つかってしまい、つかまりそうになったので、にげました。

(ぼくが旗を取るチャンスだぞ。)
そう思ったクリスピンは、木のみに向かって走り、旗を見つけました。



「あつた！ 旗を見つけたぞ！」 クリスピンは そう さげんで、
旗をつかみました。

クリスピンは 旗を にぎって ベースに 向かって
走りましたが、ウェスリーも 走るのが 速くて、
どんどん 追いついて きます。クリスピンは 森の
はずれに 向かって 全速力で 走り、 広い 野原に 出で
さげびました。「ぼくは つかまらないぞ、ウェスリー！」

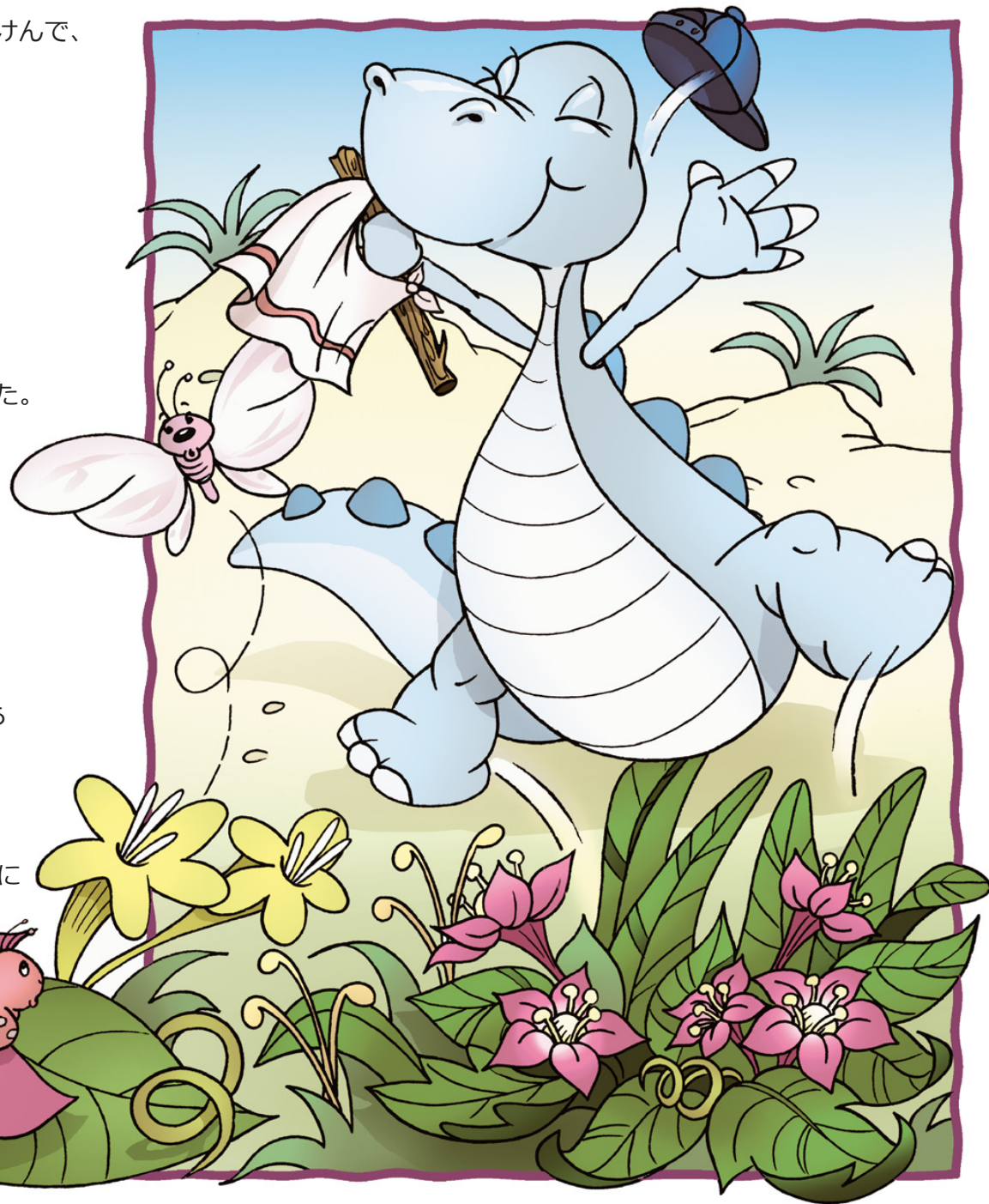
「クリスピン！ 止まって！」と、だれかが さげびました。

でも、もう 手おくれでした。クリスピンは お姉ちゃんの
ディクシーの 花だんに ふみこんで しまいました。
夢中で 走っていたので、花だんに 気付かなかったのです。
それで、たくさんの 花を ふみつけて しまいました。

「あ～あ！」 おこった ことを 見て、ウェスリーが
頭を ふりました。サッズも、何事かと、急いで 森の 中から
走り出で 来ました。

「何て ことを したの、クリスピン！」 ディクシーは、
手間ひまかけて 一生けん命 世話してきた 花だんが 台無しに
なったので、腹を 立てました。

クリスピンは、ディクシーの
花だんを 台無しにする つもりは
なかったのですが、どうしたら
いいのか、言葉も 出ません。そして、
花だんの 周りに、いつもは ある、
さくがない ことに 気が 付きました。



「さくはどうしたの?」と、クリスピン。「さくが
あつたら、^か花だんに ^{ふみ}ふみこんだりしなかったのに。」

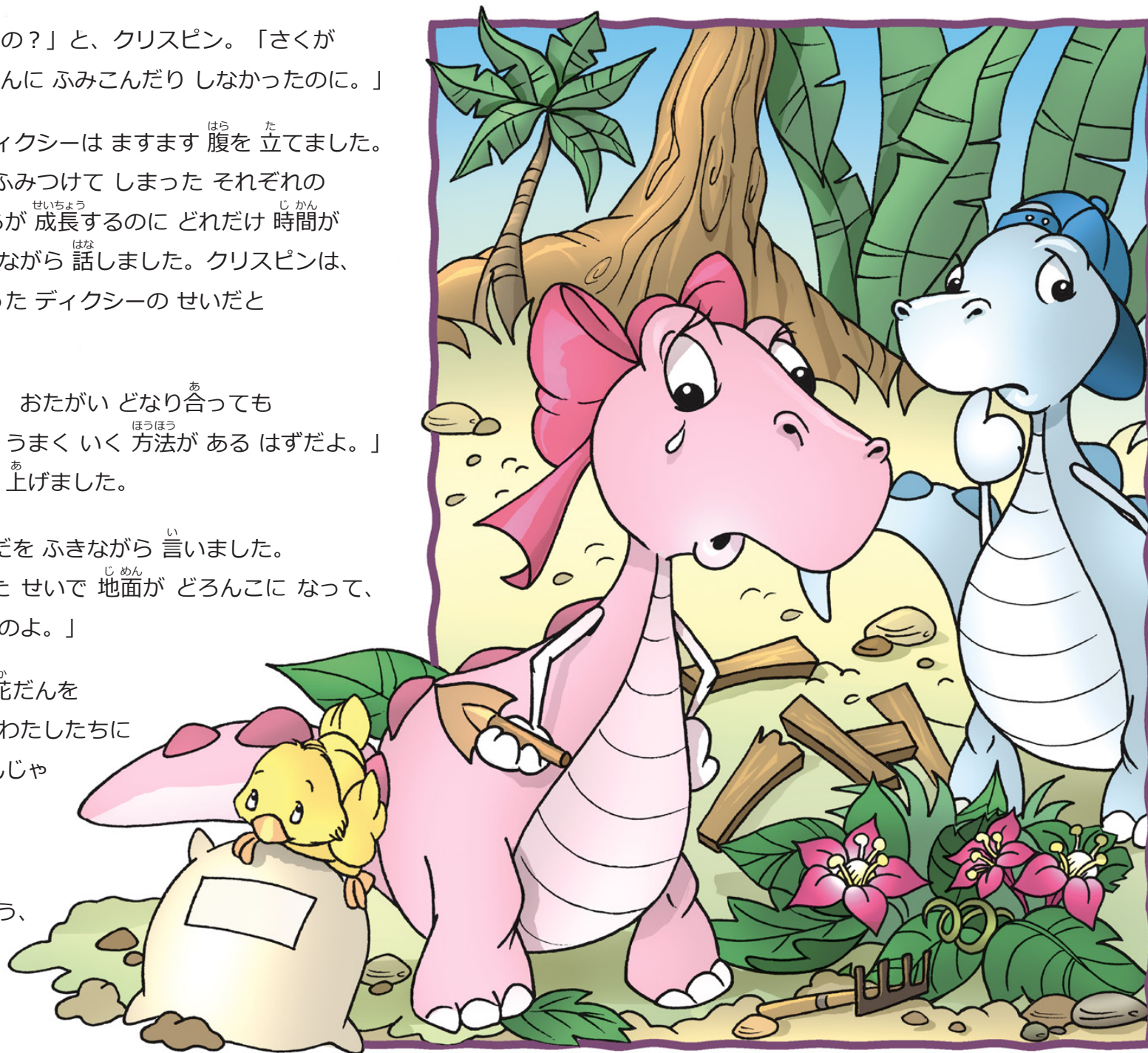
それで、ディクシーはますます ^{はら}腹を ^た立てました。
クリスピンが ^{ふみ}ふみつけてしまった それぞれの
^{はな}花の ^{なまえ}名前と、それらが ^{せいちょう}成長するのに ^{どれだけ}どれだけ ^{じかん}時間が
かかったかを ^だ立ちながら ^{はな}話しました。クリスピンは、
さくを ^た立てていなかったディクシーの ^{せいだ}せいだと
^い言い返しました。

「ちょっと ^ままって! おたがい ^あどなり合っても
しょうがないよ。何か ^{なに}うまく ^{ほうほう}いく方法があるはずだよ。」
と、ウェスリーが ^{こえ}声を ^あ上げました。

ディクシーは、^{なみだ}なみだを ^{ふき}ふきながら ^い言いました。
「^{あめ}雨が ^{たくさん}たくさん ^{ふつた}ふつた ^{せい}せいで ^{じめん}地面が ^{どろんこ}どろんこになって、
さくが ^{たおれ}たおれちゃったのよ。」

「^{そう}そうだったのね。花だんを
^{もととお}元通りに ^{する}するために、わたしたちに
^{てつだ}手伝える ^{こと}ことがあるんじゃ
ないかしら。」と、
サッズが ^い言いました。

「^{たと}例えば? ^{はな}花は ^{もう}もう、
^{めちやく}めちやく ^{ちや}ちやなのよ!」
と、ディクシー。



「まずは、同じことが起こらないように、さくを元通りに
するのを手伝うよ。」と、ウェスリーが言いました。

「折れちゃった花にはそえ木をあてて、まっすぐ
立てるようにしてあげよう。」と、クリスピン。

「それは無理よ。」ディクシーが悲しそうに言いました。
「全部ほり起こして、新しいのに植えかえなくちゃだめだわ。
クリスピン、わたし、まだおこってるのよ！」

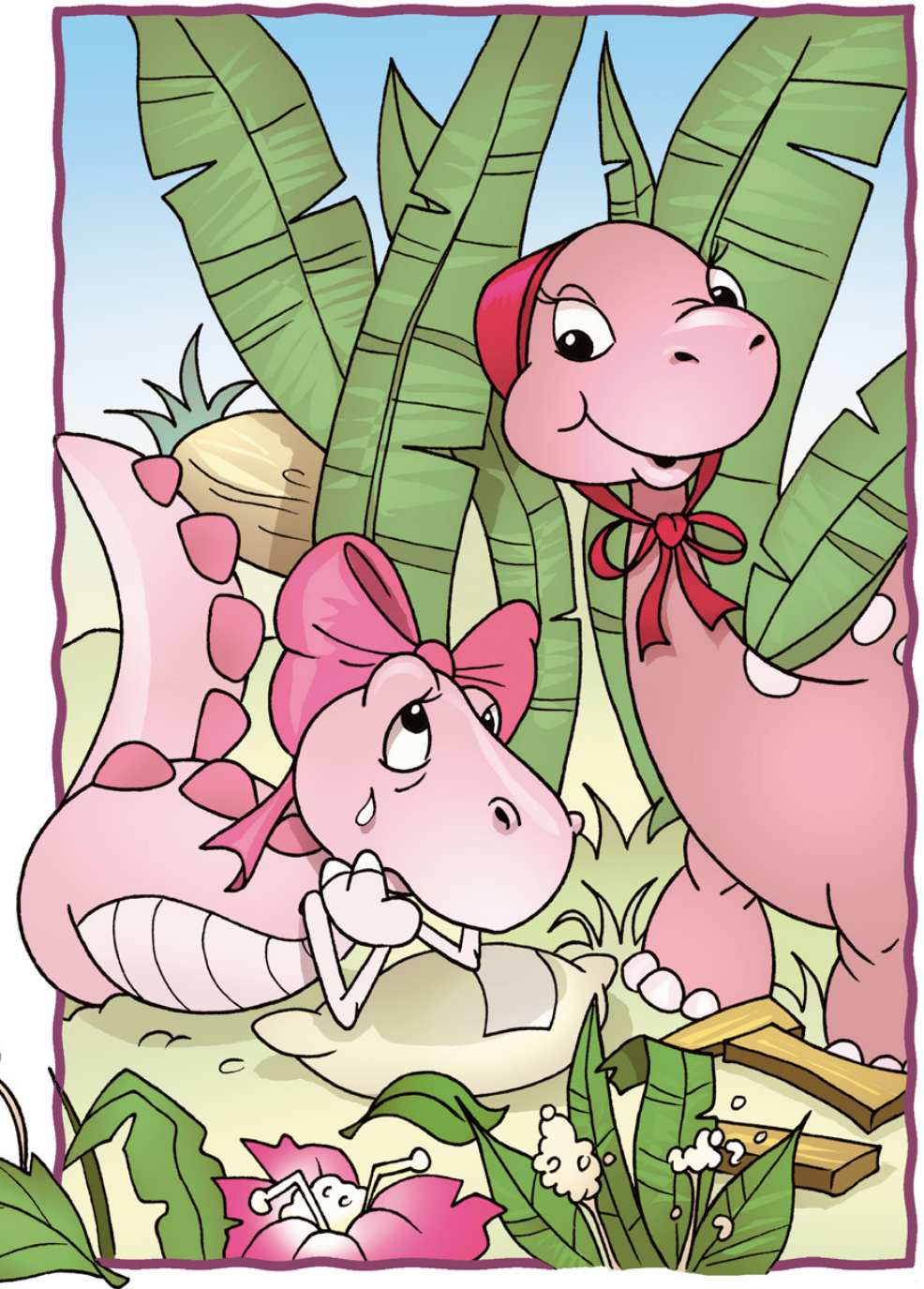
すると、サッズが言いました。「おこる気持ちには分かるわ。
でも、うっかりしてただけで、クリスピンだって、あやまってる
じゃない。ゆるしてあげたら？ みんなで手伝ったら、
何とかできる花もあるんじゃないかしら。」

「分かったわ、サッズ。おこってばかりでごめんね、
クリスピン。ゆるしてあげるわ。花だんを直すのを手伝って
くれようとして、ありがとう。」と、ディクシーが言いました。

クリスピンはほほえんで言いました。「ゆるしてくれて
ありがとう、ディクシー。花だんの手入れを本当によく
してたものね。めちゃくちゃにしちゃって、ごめんね。
まずは、さくを直すところから手伝うよ。」

「ありがとう。こっちの花は、余分な
手入れをすれば、だいじょうぶそうだわ。」
と、ディクシー。

クリスピンは、花だんを直すために
必要な工具をさがしに行きました。





サズとウェスリーも手伝って、やがて、ディクシーの
花だんは元通りきれいに なりました。クリスピンは、
「注意：花だんあり」と書いた立札を作りました。
新たに植えるための球根や種も持ってきて
くれたので、ディクシーは とても 喜びました！



「トロイ、うっかり消防車をこわしちゃったこと、
ゆるしてあげるよ。さっきはおこって、ごめんね。ぼくも、
ゆかに置きっ放しにしないで、ちゃんとたなにもどして
おくべきだったんだ。」と、トリスタンが言いました。

「ぼくも、こわしちゃって、ごめんね。今度はもっと
気を付けるよ。トリスタンのが直るまで、
ぼくのをかしてあげるよ。」と、トロイ。

「ありがとう、トロイ。うれしいよ！」

「さてと。消防車は直りそうぞ。
接着剤がかわけば、新品同様に なるさ。」
と、ジェイクおじいちゃんが言いました。

「ありがとう、おじいちゃん！
すごくきれいに直ったね。」
トリスタンが声を上げました。



きょうくん
教訓：だれでも、まちがうことはある。だから、
ゆるしが 必要なんだ。ゆるすことは、愛なんだよ。